

TOPICS

- ① 今年度における高等教育研究開発センターの取組内容等について
- ② 数理・データサイエンス・AI教育部門の取り組みについて
「職員からみた生成AIの実施報告」
- ③ 利他共生を育む講義を目指して 異なる考えと共にいるための三つの方針
- ④ Googleフォーム×Unityでできる 参加型授業の工夫
- ⑤ Google ClassroomのRead Along（言語学習支援ツール）の実践報告について

今年度における高等教育研究開発センターの取組内容等について

日野 勝吾

2013（平成25）年4月に発足した高等教育研究開発センターは、開設以来、教育の質の向上を図ることを目的に、本学全体の教育改革において先駆的な調査・研究に取り組むとともに、ルーブリックの開発をはじめとした、学修者の視点に立った教育手法の開発を通じて、本学全体の教育研究の改革・改善に尽力してまいりました。まずもって教職員の皆様方には、常日頃より当センターへのご支援・ご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

開設12年目を迎えた高等教育研究開発センターでは、これまでの調査・研究の蓄積に基づき、学生の就学状況や社会の変化等を踏まえながら、学修者本位の教育の質保証・質的向上に関する様々な取組みを継続的に展開しているところです。

ところで、中央教育審議会答申「我が国の『知の総和』向上の未来像～高等教育システムの再構築～」（2025（令和7）年2月21日）によると、高等教育が目指す姿として、「知の総和」（数×能力）の向上に向けて、教育研究の質を上げ、意欲ある全ての人が高等教育を享受できるよう社会的に適切な規模の高等教育機会を供給し、地理的・社会経済的な観点からのアクセス確保によって高等教育の機会均等の実現を図ることが必要であると提言されています。当センターとしても、当答申を踏まえつつ、学修者本位の教育をさらに展開するための具体的な方策を鋭意検討しているところです。

当センターでは、活動方針及び活動計画（2023年度～2025年度）に基づき諸活動を継続的に展開するとともに、2022（令和4）年度から「教育開発部門」及び「基盤教育部門」に加え、「数理・データサイエンス・AI教育部門」を新設し、3部門体制で活動を進めています。一昨年度より開始した全学共通の基礎教育科目（S-BASIC）について、「全学共通の英語教育プログラム」や「数理・データサイエンス・AI教育認定プログラム」をはじめ、

学生自身が「学び続けられる力」を涵養するプログラムを推進しています。こうしたプログラムを通じて、どの学部・学科においても、これからの社会を生き抜くために必要な基本的な力（知識・技能・態度）が得られるよう不断の見直しを進めています。

上記の通り、2025（令和7）年度においては、活動方針及び活動計画（2023年度～2025年度）の最終年度と位置づけられるため、現在、各年度に関する諸活動の総括等を行っています。今後、諸活動の総括内容等を踏まえ、次年度以降の活動方針と活動計画を策定してまいります。

また、調査研究活動として、前年度に引き続き、①アセスメント活動の推進とディプロマサプリメントの構築・運用を展開し、今年度中に改訂版のアセスメントプランを公表する他、②学生の成長の転機とスチューデントサクセスに関する研究として、どのような過程を経て学生の成長と変化が生じるのかを明らかにし、学生の成長プロセスを可視化する研究を進め、本学における教育や学習支援に関する具体的方策の検討に活かしてまいります。

さらに、全学共通の基礎教育科目（S-BASIC）のさらなる質的向上のため、当センター員を構成員とする基盤教育会議の開催や主幹教員制度の運用開始等の他にも、今年度より研究員制度を開始させ、当センター員と学内外から招聘する研究員との間で協働して当センターが指定する各プロジェクトを展開してまいります。

18歳人口が急激に減少するのは2035（令和17）年頃と予測されています。これまでの10年を振り返りつつ、これからの10年も見据え、本学が持続可能な大学であり続けられるよう、当センターの諸活動を積極的に展開してまいります。引き続き当センターに対するご理解・ご協力を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

（高等教育研究開発センター長・副学長 日野 勝吾 教授）

数理・データサイエンス・AI教育部門の取り組みについて 「職員からみた生成AIの実施報告」

中村 匠、杉原 亨

数理・データサイエンス・AI教育部門長の杉原です。

今回は視点を変え、現在高等教育の分野でも大きな話題となっている「生成AI」について取り上げます。アドミッションセンター千葉オフィスの中村主任より、職員の立場から見た生成AIの活用について報告いたします。本学園では現在、法人職員を対象に、法人向け生成AIプラットフォーム「法人GAI」を導入しています。以下、このプラットフォームを活用した事例について報告いたします。

アドミッションセンター千葉オフィスの中村です。2024年度教育改革推進事業にて採択された「生成AIを活用した教育手法の開発及び組織的活用に向けた試み」は、高等教育研究開発センター杉原教授と今村助教、中村を構成員としています。

職員として本事業に参加しており、申請段階では教務業務を主業務としておりました。そのため、本事業への関わり方も生成AIを授業や試験での利活用を想定するものでした。具体的には、提出されたリアクションペーパーやレポートの不正防止等に活用できるのとは考えていました。その後、人事異動に伴い、昨年度よりアドミッションセンター千葉オフィスにて業務を行っております。当初想定した職員視点の活用とは異なりますが、現業務の中での活用事例を報告いたします。

活用事例の一つ目として、受験生や高等学校の進路指導部への通知文などの作成補助になります。業務上、文書による発送が多いため、発送目的に合わせた文書を一から作成すると効率が悪く、生成AIで文書のひな形を作成することで業務効率が上がりました。発送先に合わせて、文書の微修正（日付や宛先、同封物の内容等）は必要となりますが、オフィス内で共通した文書を発信でき、修正箇所も限定的になるため、業務時に職員を制限することがありません。大学職員として、他部署においても文書作成は求められるため、応用できる活用事例だと考えます。

活用事例の二つ目は、大学案内や広報物のコンセプトや写真構図の原案作成になります。クリエイティブな部分を含むため、個人の感性によることが多いですが、生成AIを経由することで、効率よく写真で表現したいイメージやコンセプトを共有することができます。

また、キャッチコピーなどの原案も生成AIを経由することで、複数の候補から検討することもできました。

活用事例の三つ目は、入学希望者の特徴やターゲットとすべき生徒像の抽出作業になります。ポイントを絞った募集活動を行うため、これまでの経験だけではなく、IRで分析・集計された本学の入学者アンケートの結果を読み込ませてターゲット像を抽出しました。また、ターゲットとすべき生徒が関心を持てるようなキーワードなども抽出することもできました。

本事業では、日本教育工学会の24年秋季・25年春季全国大会に出席する機会をいただきました。多くの発表の中で印象的であったのは、生成AIの利用については、高度なプログラムの原理等を知る必要はなく、日本語能力が求められるという発表者の言葉でした。生成AIに目的にあった指示を出すこと、生成AIが作成したものを正しく理解する能力こそ、日本語能力が求められると感じます。今後も大学職員として、適切な生成AIの活用ができるように研修会の実施なども検討できればと考えます。



図1. 日本教育工学会2025年度春季全国大会の写真

(アドミッションセンター千葉オフィス主任 中村匠、
高等教育研究開発センター 教授 杉原亨)

先生方が取り組まれている面白い取組等の事例紹介 # 1

利他共生を育む講義を目指して 異なる考えと共にいるための三つの方針 竹本 信介

私は昨年度（2024年）、淑徳大学コミュニティ政策学部に着任し、本年度からはゼミ（ケーススタディ）を担当しています。二年目の講義方針として、大講義とゼミの相互作用を図るには、両者をどのように設計すれば学びがより深まるかを日々考えています。今回のニュースレターでは、昨年度の経験を踏まえつつ、本年度に加えた新たな工夫と、現場での経験を通じて見えてきた成果・課題をご報告します。

1.大講義の工夫

大人数の講義は、どうしても知識の一方的な伝達に傾きがちです。昨年度（2024年）は、担当する科目すべてで、初年次用導入科目「政策学概論」のテキストが示す指針である①「答えは一つではない」、②「合意形成をあきらめない」の二つを講義の基本方針として明確にし、複数の立場や価値観がぶつかる場として講義を設計してきました。

本年度は新たに③「あいまいさに耐える」を方針項目として追加しました。これは先のテキストにはない、講義担当者としての独自方針です。世界的な趨勢として社会の分断が深まる中において、あえて価値判断を急がない姿勢を重視しています。

この過程で、特に1年生からは「なぜ明確な答えを示さないのか」「なぜ周辺情報まで扱うのか」といった感想が寄せられます。これは義務教育や高校で培われた「一つの正解を求める」学びと、大学で重視する複眼的思考にもとづく学びとの差による戸惑いだと理解しています。これらの指摘が教授法（進め方）に向けられているのか、内容（テーマの意義）に向けられているのかを丁寧に見極め、前者であれば方法を見直して改善に努め、後者であれば内容の意義を改めて分かりやすく説くことを心がけています。

SNSのフィルターバブル／エコーチェンバーにより、自分に似た意見だけが強化されやすい時代だからこそ、異なる視点に触れ、少数意見の根拠を丁寧にたどる練習が、大学の講義には求められていると考えます。あわせて、本年度は防災・多文化共生・新庁舎づくり・市町村合併など千葉県の具体例を意識的に取り上げ、「自分たちの暮らしと政策はつながっている」という実感の醸成を図っています。

2.少人数講義の取り組み（ケーススタディ／ゼミ）

少人数の講義では、教室の学びを地域の現場につなぐことを重視しています。本年度は千葉県四街道市をフィールドに、市長や担当部署へのヒアリングと施設

見学を行いました。取り組みが単発で終わらないよう、事前（論点整理・質問作成）→現地（観察・対話）→事後（振り返り・提案）の流れを制度化し、可能であれば毎年度の実施を目標とし、継続による知識・知見の蓄積と活用をめざしています。



図1：「現場で学ぶ ケーススタディ受講者による鈴木陽介四街道市長へのヒアリング」

学生からは「理念が現場でどう制度化・運用されるかが見えた」「年度・予算・説明責任という行政の時間感覚を実感できた」との声があり、体験にもとづく学びの自分事化が進んでいる様子が観察されます。現場には完全な正解がないため、講義方針の「答えは一つではない」「合意形成をあきらめない」に加え、本年度から掲げる「あいまいさに耐える」姿勢を実地で練習できていると捉えています。

後期のゼミではアート・地域・行政「合意形成をあきらめない」に加え、本年度から掲げる「あいまいさに耐える」姿勢を実地で練習できていると捉えています。後期のゼミではアート・地域・行政の関係を主題に、千葉県内の公共美術館へのヒアリングを予定しています。



図2：「ヒアリングを終えて 学びの現場で記念撮影」

（次ページへ続く）

先生方が取り組まれている面白い取組等の事例紹介 # 1

利他共生を育む講義を目指して 異なる考えと共にいるための三つの方針 竹本 信介

ちょうど千葉市では今年度から千葉国際芸術祭が始まり、ゼミでの取り組みを進めるうえで良い社会環境が醸成されつつあります。得られた知見は、学部の子課外活動であるサービス・ラーニングの実践やノウハウへも接続していく考えです。

3. レジューメづくりの工夫

昨年度（2024年）からの継続として、復習用レジューメを配布しています。内容の整理に加え、次回につながる小さな問いを添えて、学びを継続しやすい流れをつくっています。本年度は新たな項目として「要点チェック」を設け、自己点検を通じて弱点の発見と補強を促す機会を創出しました。

レジューメの読みやすさの観点では、以前からUDデジタル教科書体を採用してきましたが、本年度からはその理由を講義内で明確に伝えています。可読性に配慮した設計により目にやさしく、少しでも安心して学習に集中できる環境の提供を意図しています。あわせて、同フォントの開発者である高田裕美さんの著書『奇跡のフォント』（時事通信社、2023年）を講義内で回覧し、文字を「学びを支える道具」として捉える視点を共有しています。フォントから福祉の視点へ、ひいては民主主義への関心にも広がるよう、学習環境そのものの教材化を意識して取り組んでいます。

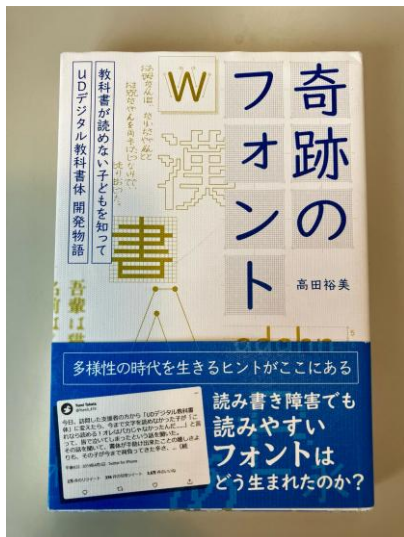


図3：「授業内で回覧した『奇跡のフォント』（高田裕美／時事通信社、2023年）」

4. 成果とこれからの課題

これらの取り組みにより、大講義では多面的に政策を考える力が、少人数講義では地域課題を自分事として捉える姿勢が、少しずつ育ってきていることを願うばかりです。復習用レジューメと要点チェックは、試験対策にとどまらず、学びの習慣化と振り返りの質の向上にも資していると考えます。

一方で、課題も明確になってきました。第一に、事前学習の設計です。短時間で資料にアクセスし論点を整理する手順（読み方ガイド、要約テンプレート、キーワード集など）の整備が必要です。第二に、評価方法の見直しです。レポートや試験に偏らず、講義参加・発言の質・協働のプロセスを反映する指標（事前要約の充実度、他者の意見への応答、討議後の自己修正など）を導入したいと考えていますが、大規模講義では理想と現実の調整が課題です。現状では妥協策として、提出レポートへの個別コメントを返却する運用を継続し、可能な限り双方向の関係構築を探究しています。第三に、地域との継続的な連携です。単発訪問で終わらず、小規模リサーチ、成果共有会、提案書ワークショップ等を通じて、自治体・NPOとの協働枠組みを、無理のない範囲で継続的に設計していく所存です。

5. まとめ

本年度の新たな取り組みは、①教科書にはない独自方針「あいまいさに耐える」を据えた大講義の運営、②現地訪問を積極的に組み込んだ少人数の学び、③要点チェックとUDフォントを活用したレジューメの提供、の三点です。表層的な技術改変に見えるかもしれませんが、いずれも主体的な学習と社会との接続、そして両者の相互作用をめざす取り組みです。講義とゼミの連携が十分な相乗効果を生むまでには、もう少し時間がかかるかもしれませんが、複数の視点を持ち寄り、現場の感触と学術的な視野を往復する学びは、確実に学生の思考を厚くしていくと確信しています。

小さな改善の積み重ねが、やがて学部に新しい知性を根づかせ、学内外の多様な連携から新しい発想を生み出すはずだと考えています。今後も、豊かな知見をもつ先生方と経験豊富な事務職員の皆さまとともに、準備・評価・連携という三つの基盤を磨きながら、「異なる考えと共にいる」、すなわち本学の理念である「利他共生」と響き合う姿勢を育む場づくりを進めてまいります。引き続き、ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

（コミュニティ政策学部コミュニティ政策学科

助教 竹本 信介）

（次ページへ続く）

「せっかく対面で集まっているのに、黙って話を聞くだけではもったいない」

大講義形式の授業でそう感じたことが、今回の取り組みの出発点でした。経営学概論にて私が担当した回の講義で、学生が自由にコメントを書き込み、それをリアルタイムでスクリーンに表示する仕組みを試してみました。

もともと実験的な取り組みではありましたが、思いのほか学生が盛り上がってくれ、終了後にも印象に残ったという声が届きました。この記事では、その際に使用したシステムや工夫した点について、簡単に紹介できればと思います。

使った仕組みについて

特別な機材や有料サービスは使っておらず、大学アカウントで利用できるGoogleフォームとスプレッドシート、そしてUnity（ゲーム開発エンジン）を組み合わせ、以下のような流れを作りました。

【1】Googleフォームでコメントを受け取る

学生はスマホやPCからフォームにアクセスし、自由記述欄にコメントを入力します。

授業内ではQRコードを配布し、その場で投稿してもらいました。

【2】Googleスプレッドシートに自動保存

投稿内容はスプレッドシートに自動で記録されていきます。ここで保存されたコメントは、Google Apps Script（GAS）を用いてJSON形式に整形し、Unity側からアクセスできるようにしました。

【3】Unityでコメントを画面表示

Unityで作成したアプリが、スプレッドシートのデータを1秒おきに取得し、スクリーン上に次々と表示する仕組みです。ライブ配信のチャット欄のような感覚で、学生のリアクションがその場に流れていきます。

学生の反応

講義中にコメントがどんどんスクリーンに現れることに学生たちも驚き、「自分の言葉が授業に反映されている」ことを楽しんでいる様子でした。

実施したのはこの1回のみでしたが、期末（7月末）の授業評価アンケートでは、次のようなコメントが寄せられました。

「山脇先生の回で使ったアプリのようなものを、他の授業でも使ってほしい」

学生にとって印象に残る体験だったようで、一方向ではない講義のかたちを模索するうえで手ごたえを感じました。また、150名を超える大講義室では、通常、授業の終わりに学生から声をかけられる機会は少ない

のですが、この回に限っては、画面越しに多くの学生から「ありがとうございました」とコメントが寄せられ、教員としてもささやかな嬉しさが残る授業となりました。

安心して運用するために

「自由に投稿してもらおう」となると、不適切なコメントへの懸念もあるかと思います。

今回は以下の対策で、安全に運用することができました。

- ・Googleフォームに「大学アカウントでのログインを必須」に設定→ 学外者のアクセスを遮断し、外部からの投稿や悪戯を防止できます。

- ・Unity上で、コメントをクリックして削除できる機能を実装→ もし不適切な投稿があっても、教員がその場で非表示にできます。

- ・学生にも「アカウントと紐づけされているので、発言は追跡可能である」と事前に説明

→ その結果、150人規模の授業にもかかわらず、不適切な投稿は一件もありませんでした。

本アプリは生成AIを活用して開発しました

今回のアプリは、ChatGPTなどの生成AIに「こういうものを作りたい」と伝えながら、対話形式で少しずつ開発を進めていきました。所要時間はおおよそ6時間程度で、生成AIの出力を参考にしつつ、必要に応じて試行錯誤を重ねながら構築しています。

私自身、こうした開発に詳しいわけではありませんでしたが、対話を重ねることで徐々に理解が深まり、予想以上にスムーズに取り組むことができました。

導入に興味がある先生へ

フォームやスプレッドシートのテンプレート、生成AIに伝えるプロンプトの例など、必要に応じて共有可能です。

「Unityは初めて」という方も、手順を追えば取り組める構成です。



図1 講義の様子

おわりに

手元にある無料ツールや生成AIを活用することで、比較的手軽に実現できる工夫もあるのではないかと感じました。今回の取り組みも、まだ発展途上ではありますが、こうした小さな試みのひとつとしてご紹介させていただきました。

（経営学部経営学科 准教授 山脇香織）

「Google ClassroomのRead Along（言語学習支援ツール）の実践報告について」

今村 有里、岩崎 ゆり子

2025年度より本学のGoogle Classroom（以下GC）に新機能として追加された「Read Along」の活用について報告いたします。本報告書は、S-BASIC（全学共通基礎教育科目）における「コミュニケーション英語I／II」（1年次開講科目）を担当する2名の教員による授業内実践をまとめたものです。

1. ICTを活用した外国語教育について

外国語教育とICTの親和性は高く、文部科学省（2020）は初等・中等教育におけるICTの活用を推進しており、さまざまな実践例も報告されています。したがって、大学教育においてもこの流れを止めることなく、ICTを積極的に活用することで外国語学習の一層の充実を図りたいと考えています。実際に、S-BASICの英語科目では、教科書付属のClassroom Presentation Toolや、教員独自のPowerPointスライドなどを用いてICTを活用する教員が多く見られます。また、Instagramの投稿やYouTubeの動画を紹介したり、GCを活用して課題を提示したりする事例もあります。

2. Read Alongについて

Read Alongは、GCに搭載された言語学習支援ツールです。学生は自分の興味・関心に合わせてリーディング教材を選び、音読と読解の両スキルを練習することができます。図1は練習画面の一部で、正確に発音できた語句には得点（右上のスター）が付与され、発音が難しい箇所についてはAI（右下の女の子）が音声でアシストします。また、教員はGCの課題機能を通じてRead Alongを活用することができ、ツール内に収録された教材を利用するほか、独自の教材を作成して配信することも可能です。教員ページからは学生の読み取り精度、練習が必要な単語リスト、過去の課題の平均値（音読の正確性、1回で正解した割合、課題の完了率、読み上げ速度）を確認することができます。

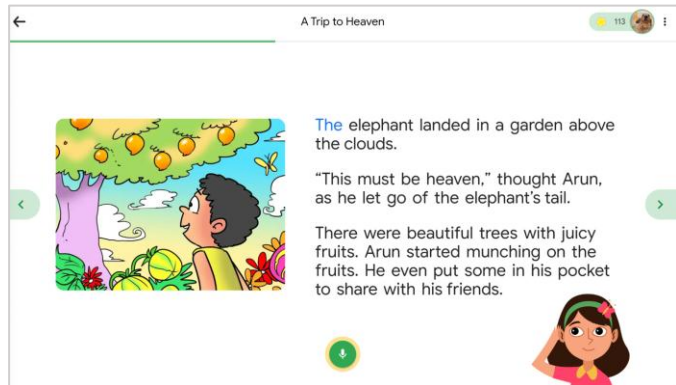


図1 Read Alongの練習画面

3. 授業での実践例（岩崎ゆり子）

指定教科書（成美堂 New Connection）のLanguage Focusセクションの発信用フレーズを使ってRead Alongの原稿を作成して授業課題としています。学生が授業のペアレッスンで練習した英語のフレーズを復習し、少しでも英語を発信する経験を身に付けてもらうことが目的です。

実施手順は図2のとおりです。

1. 授業において、リピートやペアレッスンで発話練習を行い、気を付けるべき発音・アクセント・イントネーションについて伝える
2. GCに手順を含んだ課題を学生に割り当てる
3. 学生が提出後、各学生のRead Along評価画面をスクリーンショットし、フィードバックとしてメールに貼って送付（図3）
4. クラス全体の分析情報を返却後のクラスで共有し、ピックアップされた単語の発音の注意点など説明しリピートして練習（図4）



図2 GC 課題揭示例

※既存音源がある場合は、原稿PDFとともに音源を添付し、実践する前に練習することを推奨している。
※既存音源がない場合も原稿のPDFを添付し事前練習を促す。AIの発音サポートがあることを事前に周知している。

（次ページへ続く）

「Google ClassroomのRead Along（言語学習支援ツール）の実践報告について」

今村 有里、岩崎 ゆり子



図3 Read Along 評価画面



図4 クラス全体の分析情報例

学生へのフィードバック

学生には授業内でのフィードバックやクラス全体の発音分析結果を通じて、発音のどういう点に気を付けるべきか指導しています。例えば、練習が必要な単語として引っかけた言葉が「walk」であれば「work」との発音の区別などを意識して発話させています。前期では、課題を通して正確性を最も伸ばした学生を表彰しました。

Read Alongの実践を通して

現状では、音源の提出がないことから学生の発話の細かい点を把握できないという課題があります。しかし人前で話すことに躊躇する学生もこの方法であれば、確実に英語を話すことを体感することができます。

また数字によって自身のスピーキングスキルが可視化されるので、学生のモチベーションにつながっていると感じています。

4. 授業での実践例（今村有里）

指定教科書（成美堂 New Connection）のListening & Speaking活動の復習として、Read Alongを活用しています。授業内でペアによる会話の練習を十分に行った後、宿題として会話内容の復習をRead Along上で実施できるようにしています。授業中にすべての学生へ個別

に発音指導を行うことは難しいため、Read Alongを通して学生自身が発音の課題に気づき、自己改善につなげる良い機会となることを期待しています。

学生へのフィードバック

岩崎先生と同様、GCの教員用ページから各学生の正確性スコアや、さらなる練習が必要な単語のリストをスクリーンショットとして保存し、学生一人ひとりにメールで送付しています。また、GCの限定コメント欄では、正確性スコアに応じて「Hi ○○, great work!」などの個別コメントを残し、教員－学生間のラポールの向上を図っています。

Read Alongの実践を通して

毎回、音声为正しく認識されないと報告する学生が数名おり、その対応には情報センターの支援が必要となっています。それでも、授業外でスピーキング練習の機会を提供できる点は、日常的に英語を話す機会が少ない日本の英語学習者にとって非常に有効であると考えます。さらに、練習が必要な単語のリストが提示されることにより、学習の個別化を促進できる点も大きな利点です。

5. 今後の課題・展望

前述のとおり、学生が練習した音声データを教員が直接確認できないため、学生の発話の細部を把握しづらいという課題があります。これに対し、Microsoft Teamsには「Reading Progress」という類似機能があり、学生の発話をAIがディクテーションし、誤った単語を色分けして表示するとともに、自動的にフィードバックを行うことが可能です（図5）。学生はどの部分を誤ったのかを一覧で確認できるため、学習効率の向上が期待されます。また、この機能では音声・映像を提出できるため、教員が学生の発話内容を正確に確認し、AIによる誤判定を修正することもできます。

（次ページへ続く）

「Google ClassroomのRead Along（言語学習支援ツール）の実践報告について」

今村 有里、岩崎 ゆり子

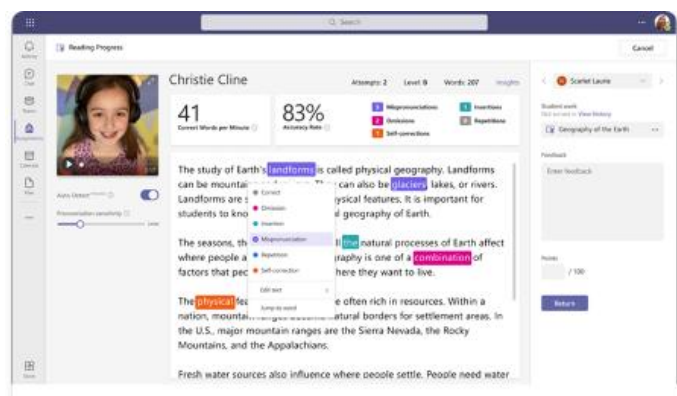


図5 Reading Progress（引用元 マイクロソフト）

さらに、使用しているデバイスやマイクの状態の差によって音声認識が失敗し、課題を提出できない事例も見られます。また、現状ではRead Alongの評価画面は教員のみが閲覧可能であり、学生自身がスコアや発音の結果を確認できません。そのため、教員が各学生の評価画面をスクリーンショットして共有する必要があり、運用上の負担が懸念されます。

これらの課題はあるものの、Read Alongは授業外でのスピーキングおよび発音練習を支援する効果的なツールであると感じています。今後、英語科目において本ツールの活用がさらに拡大し、学生の英語学習の促進につながることを期待します。

参考文献

文部科学省. (2020). 外国語の指導におけるICTの活用について.

https://www.mext.go.jp/content/20200911-mxt_jogai01-000009772_13.pdf, (2025年10月14日アクセス).

Microsoft. (n.a.). *Getting started with Reading Progress in Teams*.

<https://support.microsoft.com/en-us/topic/getting-started-with-reading-progress-in-teams-7617c11c-d685-4cb7-8b75-3917b297c407>, (2025年10月9日アクセス).

（高等教育研究開発センター 助教 今村有里，
東京キャンパス 英語科目担当兼任講師 岩崎ゆり子）

ごあいさつ

今年度も高等研ニュースレターを発行することができ、関係者の皆様には多大なるご協力を賜り感謝申し上げます。

高等教育研究開発センターは、本学の教育研究の改革・改善に資する活動を継続的に進めております。

令和7年度には、センターの研究活動をより一層充実させるため、「研究員制度」の取り組みを開始いたしました。



当制度は、将来を期待する本学の若手・中堅教職員の中から、センター長が指名する「兼任研究員」に加え、学外の専門家からの多角的な視点や客観的知見を取り入れることで、センターの研究活動に新たな広がりをもたらすことをねらいとした「兼任研究員」と構成されており、令和7年度の「研究員募集」では、2名の研究員が任用されることとなりました。

こうした学内外の連携を通じて、センターはこれまで以上に実践的で開かれた高等教育研究を推進し、淑徳大学の教育の質的向上に貢献してまいります。また、教職員の皆さまの当センターの研究活動の積極的な参加を歓迎いたします。

今後とも、皆さまのご理解とご協力とを賜りますようお願い申し上げます。

淑徳大学 高等教育研究開発センター NEWS
LETTER 2025 第1号

発行日：2025年11月6日

編集：淑徳大学高等教育研究開発センター

TEL：03-5918-8948

FAX：03-5918-8968

E-mail：kaihatsu@soc.shukutoku.ac.jp